

定年後に同時通訳者になれた理由 田代真一郎

定年後、すぐに受けた TOEIC で満点を取り、今ではブースに入って同時通訳もやります。

江戸時代後期の思想家・二宮尊徳がこんな歌を残しています。

この秋は 雨か嵐か 知らねども 今日の勤めに 田の草を取る

未来に何が起こるかを、誰も正確に見通すことはできません。できることは、いま必要だと信じることを、淡々とやること、それだけです。

しかし、コツコツとやり続けたことは、必ず積み上がっていきます。英語の学習においても「今日の勤めの田の草取り」を習慣にしたいものです。

【50 歳】仕事で英語が本当に必要になった

◆ついに黒船がやってきた！

50 歳のとき、会社が外資の傘下に入りました。その名は「ダイムラー」。その数年前には米ビッグスリーの一角、クライスラーとの合併を果たし、当時は自動車業界随一のグローバル企業と言ってもいい存在でした。

ダイムラーがやってきて、仕事のやり方はもちろん、ビジネスへの考え方が変わりました。何より、会社の中に外国人が増えました。それまでは、旧財閥系の生粋日本企業のイメージでしたから、異常と言っていいほどの増え方でした。

まず、常駐でやってきた幹部社員がいました。それから、ダイムラー社やクライスラー社との間で共同プロジェクトが多数立ち上がり、ドイツやアメリカから大勢の出張者がやってきました。

海外メーカーから部品を購入することが奨励され、ここでも世界中のいろんな会社から、駐在員や出張者が入れ代わり立ち代わり訪れるようになったのです。

海外出張やテレビ会議の回数が圧倒的に増え、私も多い時期には毎月のように海外に行きました。テレビや電話での会議に至っては、一日のうちに 3、4 件をかけ持ちしたこともありました。会社の中の様子も、仕事の進め方も、あっという間に大きく様変わりしたのです。

そんななか、私のメインの仕事は、クライスラー社との車の共同開発、担当は駆動系でした。プロジェクト推進のために週に一度のテレビ会議を、2 年ほど続けました。

実は、私の英語力が飛躍的に伸びたのは、このときだったと感じています。いま振り返っても、非常に中身の濃い、印象深い 2 年間でした。

55歳にして、初めての英語の学校。試験を受けて「基礎科Ⅰ」というクラスにランクづけられました。

通訳学校というのは、一般には基礎科の前に「準備科」というのがあって、それから基礎科Ⅰ、Ⅱ、本科Ⅰ、Ⅱ、そして最上級の同時通訳科Ⅰ、Ⅱへと続きます。

もう一つ、定年後の通訳者への道には大きなターニングポイントがありました。それは58歳のときでした。本科Ⅱから同時通訳科への進級を許されたのです。

問題は、同時通訳科が大阪校にしかないということでした。当時私は、名古屋市の郊外に住んでいましたので、毎週土曜日午前開講の講義に出席するには、5時半に起床して**新幹線通学**が必要でした。

せっかくの週末ぐらいゆっくりしたい気持ちもあるし、同時通訳科に行くとなれば、予習復習にも時間がとられます。費用だってかかります。

どうしようかと迷いましたが、同時通訳というのがどういうものか、一度は経験してみたいとの思いから通うことに決めました。この遠距離通学は、60歳定年で実家のある大阪へ戻るまでの2年間続くことになります。

あのとき、大阪まで通うことを決断していなかったら、やはり定年後の通訳者の誕生はなかったらろうと思います。

右も左もわからない通訳の世界。「下手な鉄砲も数撃ちゃ当たる」の流儀で、**書類を30社ほどのエージェントに送りました**。どんなものかと思っていましたが、定年後の通訳者にも仕事を出してくださるところがポツポツとあったのです。

そしてありがたいことに、1年目、2年目、3年目と倍々ゲームで仕事は増えていきました。憧れていた同時通訳の仕事も、デビュー後わずか1年目でゲットしました。

もし、英語力がすべてに優先するなら、定年後の通訳者など、この業界で生き残ってはいけません。だって、20年、30年と英語を磨いてきた猛者はいくらでもいるのですから！

定年後の通訳者でも、ありがたいことに仕事がいただけるのは、英語力のほかにも、コミュニケーション力を支える強い味方があるからです。それが、知識であり、経験であり、情報です。

私の場合には、サラリーマン生活の中で身につけた、**自動車をはじめとする技術の知識であり、ビジネス全般の知識**です。

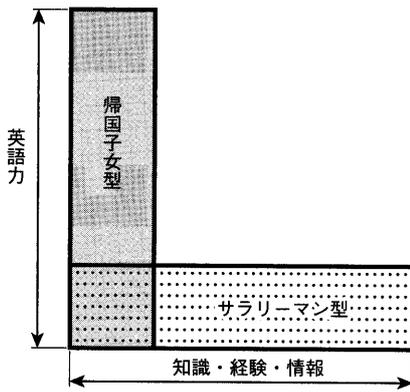


図5. 英語力偏重型（帰国子女型）と知識力偏重型（サラリーマン型）

「英語は誰にでも身につく。それは毎日、ちょっとした時間でも、机の前に座ることである」。これもまた、真理です。

five score years ago 100年前
score 20

単語学習にかけた時間や労力は、決して無駄にはなっていません。記憶の中に確実に残っています。身につかないのは、途中でやめてしまうからです。

まったく新しい50ワードの単語シート1枚を覚えるのにかかる時間は、だいたい1時間ぐらいでしょうか。初めて見る単語は、覚える手がかりが見つげにくくて苦勞するものです。

おまけに、初回は記憶の定着が弱く、1週間もすると半分ほどを、1か月も経つとほとんど忘れてしまいます。

しかし、1週間後に同じ単語シートを覚え直してみると、前回1時間かかったものが20分程度でできてしまいます。

私は定年後プロ通訳者になったとき、自動車など技術分野のほかにも、専門分野を持ちたいと考えました。それが医療であり、IR（インベスター・リレーションズ、投資家向け広報活動）です。ともに、通訳の需要が多いと聞いていたからです。

最初の頃、医療関係の単語を覚えるのには大変苦勞しました。どれも耳慣れず、また長い単語が多いのです。

たとえば、「非ステロイド性抗炎症薬」は「NSAID=nonsteroidal anti-inflammatory drug」、「副鼻腔炎」は「paranasal sinusitis」、「気管支炎」は「bronchitis」とか、こんなばかりです。

しかし、我慢強く覚えはじめると、1回目よりは2回目、2回目よりは3回目と、先述の経験則で述べたように、どんどん記憶に残ることを実感しはじめました。

そのとき私は 62 歳、それでも記憶力は大丈夫でした。

通訳者の学習方法で「サイト・トランスレーション」(略して「サイトラ」と呼ばれるものがあります。英語では「sight translation」、日本語訳を充てるなら「視訳」。

つまり、書かれた原文(英語でも日本語でも)を目に入った単位ごとに頭からどんどん口頭で訳していくことを言います。

知らないことは訳せない。単語が出ないと苦労する。逆もまた異なりです。中身を知っていることは話しやすいし、単語を知っていたらとっても楽なのです。

私は 50 歳を過ぎて英語に興味を持ちはじめたころから、多くの文法書や参考書を読みました。その中でも、圧倒的にすぐれていると思ったのが 1 冊目のこの本です。

☆石井辰哉『TOEIC TEST 文法別問題集 200 点 UP を狙う 780 問』(講談社)

タイトルにあるとおり、TOEIC テストを念頭に置いた問題集です。問題(別冊)とその解答、解説(本冊)が分冊になっていて、まず別冊の問題を解いたあとで本冊の回答と解説を読み、文法事項を習得していくというスタイルになっています。文型や時制、関係詞や仮定法などの学習項目が、章ごとに問題と解説で構成されています。

全部で 780 問ですが、私はこの問題集を 10 回以上はやりました。

☆江川泰一郎『英文法解説 A NEW GUIDE TO ENGLISH GRAMMER』(金子書房)

私がこの本を買ったのは、もう 10 年以上も前のことになりますが、その時点ですでに「改訂三版第 10 刷発行」となっていますので、間違いなく文法書のベストセラーではないかといえます。

「日本外国人特派員協会」の公式サイト

<http://www.fccj.or.jp/>

「日本記者クラブのホームページ」

<https://www.jnpc.or.jp/>

私はどちらかというと、文学作品が苦手です。雑誌は、構成や文章のロジックが明快ですが、文学作品は必ずしもそうではありません。

理解するのにロジックが機能しない、そういうところが理科系脳の私は苦手です。また、

文化的、時代的な背景知識がないと理解が難しいのも文学作品の特徴です。

☆越前敏弥『越前敏弥の日本人なら必ず誤訳する英文』（デイスカヴァー・トゥエンティワン）

日本人が訳を間違えやすい英文がいくつも紹介されていて、それぞれに著者の訳例と解説がついています。

ニュース番組も、聴解訓練にはいい教材になります。BBC、CNNなどいろいろありますが、ここでは「PBS: Public Broadcasting Service」のニュースサイト (<https://www.pbs.org/>) をご紹介します。

このサイトがいいのは、原稿が揃っていることです（ニュースサイトには原稿のないものが多い）。したがって、理解の確認ができますし、語彙を確認して単語帳に取り込むのも容易です。

もちろん、聴き、読むことで、ニュースを通して世界の動きにも敏感になれるます。

私は、ラジオでは杉田敏先生の「やさしいビジネス英語」（**実際はちっともやさしくありませんでした**）や、遠山顕先生の「英会話入門」を長く聴いていました。テキストは、毎月書店で買っていましたが、内容的にも使いやすさの面でも、非常によくできたものでした。

私は通訳のほか、時に翻訳の仕事もしますが、日英翻訳の場合には、日本人翻訳者が翻訳した原稿に、英語母語者のチェック（**プルーフリーディング**）が入るのが普通です。

翻訳に要する時間も、同じページ数なら日英は英日よりもはるかに長くかかります。このように、非母語者にとって外国語での作文はハードルが高いのです。

◆ディクテーション——徹底的に聴く

英語を聴いて書き取る訓練です。ポイントは、「聞いて単に理解しました」で終わるのではなく、実際に書き取ることです。

くれぐれも、聞き取れないところをそのまま放置しないこと。どうしてもわからないところは、前後の文脈からの推定や文法知識も駆使して、とにかく書き取りを完成させます。

ディクテーションをすることで、冠詞や三人称単数現在の「s」、音の弱い前置詞など、普段はいいかげんになりがちな、細部への注意力が培われます。

what you truly want to become

いくつか、特徴と留意点をあげておきます。シャドーイングでは、話者の発話と間を置かないので、英語を記憶する負担はありません。

しかし、同じことを話さなければならないので、聴く集中力は維持されます。間髪入れずに続くので、発音、リズム、強弱、抑揚など、話者の語り口がそのまままねできます。

5分、10分と続けると、舌の動きが滑らかになり、口周りの筋肉もはぐれて、英語が話しやすくなったように感じます。

訓練としては、単に音を記号として追いかけるのではなく、意味の理解も同時に進めるよう心がけてください。**意味もわからずにシャドーしないことです。**